宰相と吾輩

檀一雄

太宰と安吾

一九八九年八月十五日発行

著　者　檀　一雄

発行人　沖山隆久

発行所　株式会社沖積舎

東京都千代田区神田神保町一－五二郵便番号一〇一

電話二九一－五八九一振替東京三－一七七六三二

ミツワ印刷十光堂／小高製本

ISBN4-8060-4534-9 C1095

太宰と安吾

檀一雄

沖積舎

太宰と安吾・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一部　太宰治

文芸の完遂　一三
おめざの要る男　一七
光焔万丈長し　一九
太宰時間（アワー）　三三
赤門　三五
熱海行　二七
太宰治と読書　四七
熱風　五三
淳、安吾、治、覚え書　七三
走れメロスと熱海事件　七七
太宰治の文学碑　八〇

文士十年説　八三
紫露草と桜桃　八八
青春放浪　九一
「桜桃忌」によせて　一二〇
文学裁判　一二四
或る時期　一二八
アクロポリスの太宰治　一三一
太宰治の言葉　一三四
恋と死　一三六
「太宰治の魅力」　一四三
死と健康　一四四
太宰治と伊馬春部　一四六
友人としての太宰治　一五〇

精根傾け描く太宰像　一五三
出世作の頃　一五五
太宰治の人と作品　一八九
太宰治・人と文学　一九九
「恍惚と不安」序文　二〇七

第二部　坂口安吾

坂口安吾論　二一二
安方町　二三三
安吾・川中島決戦録　二三五
坂口安吾の死　二四五
「わが人生観」解説　二五五

「坂口安吾選集」解説　二六一
「堕落論」解説　三三五
坂口安吾　三三〇
二月空漠　三五八
安吾を想う　三六二
破戒と求道　三六六
安吾と赤頭巾　三六八
男性的思考の持主　三七〇
安吾の狂気　三七一
異常な魂との出会い　三七四
文芸退廃に抗して　三七六
坂口安吾と尾崎士郎　三八〇
安吾と漫画　三八六

解説　無頼の信実・真鍋呉夫　三八九
あとがき

太宰と安吾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

装釘＊戸田ヒロコ

第一部

太宰治

文芸の完遂

太宰治の死の原因を考えていって、私は疑いもなく、彼の文芸の抽象的な完遂の為であると思った。文芸の壮図の成就である。彼の死を伝え聞いた総ての人々が、その事情を察知し感得しながら、さて、その死を語る際になると、日頃見聞に馴れた世上の自殺風を附会していった。

太宰の死は、四十年の歳月の永きに亘って、企図され、仮構され、誘導されていった彼の生、つまる処彼の文芸が、終局に於て彼を招くものであった。太宰の完遂しなければならない文芸が、太宰の身を喰うたのである。

ただ、人々は、文芸の完遂の為に死を選ぶということを咄嗟に首肯しながら、おのれの市井風の身上に紛れ考えていって、その断定をためらった。

仮構された抽象的な生の完遂の為に、人は果して死を選び得るか？　ここに、疑いつつも芸術の至上を選び踏まえた、果敢な、太宰の純潔があるのである。その生の誘導が、正しかったか否かは、しばらく問うまい。その壮図が、彼流に申し分のない首尾を整えて達成されたことについて、私は太宰の為にひそかな祝盃を挙げれば足りる。

評者は屢々芥川の死と竝べて云々するが、私の理解する範囲内に於て、太宰は遙に熾烈な功

名心と、彼の文芸の温床であるところのその仮構された生の首尾を全うしたいと祈求する文芸完遂のはげしい悲願に追いたてられていた。ゴルゴタへ急ぐふうの思い入れである。その発端の意志の当不当は別として彼の選びとった生の完遂に関して、驚くほど真摯誠実であった。

太宰は、それを、好んで義の為だと云っている。義の為とは何か？　疑いもなく、彼の完遂しなければならない文芸の謂に外ならぬ。亀井勝一郎氏は、太宰の死の原因を本人に問うならば「千々に乱れて」と照れくさそうに答えるだろうと語っている。この友誼に敦い批評家は、情景を世話物風に修飾して、切なく可憐ではあるが、私は肯けなかった。「父は義の為に死んだ」とはっきり云うだろう。いや、彼は死の寸前に至る迄、至るところで、そう言っているのである。

若し文芸家の生死の裁量が、女々しい井戸端会議風の興味につながり得るものなら、己の文芸に喰われて終うというようなむごい事実はおこるまい。太宰の場合は、文芸家のみが選び得る、このような厳粛な自己完遂の死であった。

彼の自己完遂の為の死は、早く十三年前決定していたと云えるだろう。前の自殺未遂の折のこと、中村地平氏はその少し先の夜、太宰と娼家に同行して、彼がサックを使用していたことを思いうかべながら、おそらく自殺は狂言だらうと語っていたが、私は肯かなかった。

太宰が『狂言の神』と記すのは、彼の人生が仮構されているという意識上の自負であって、その故にこそ、死も亦壮烈に選び取られねばならなかった。

彼の仮構された人生は、死を選ばねば完成されぬ。彼の文芸は、彼の自殺をまたねば成就を見ない。太宰は早くから、このような執拗な妄想にのみ生きていた。「爾の為す事を速かに為せ」と彼が聖書に異常な関心を寄せていたのは、キリストの生涯に、恐しい符合と先駆を見て、震撼されていたからである。

然しその死の時期の選定については、太宰は最も世俗的な判定の規準に鋭敏であり、果断であった。己を知るものと云うべきであろう。従って彼の結核が既に決定的な段階に入ったという自覚、彼の世評がほぼ高潮に達しているいう安堵と危険、太田静子の懐妊、山崎富栄との不決断な交渉（この何れの場合も恋ではない、彼のような虚栄の男に恋愛が成立しない事を私はよく知っている）これらの均衡を見渡して、選ぶべき時期は今だと裁決しただろう。そうしてこの時期に死を選べば、彼が最も憂慮していた妻子が、少なくも餓える気づかいのないことをも、勿論のこと予想した。

太宰の死の直後、その夫人が雨洩りのする三和土の上を跣足になって洗い流していたという新聞記事は、私には一際哀切に思われた。太宰が生前、「息子の戦死を聞き、黙って背戸に出てシャッシャッと米をとぐ母」と語っていたことを思い合わせたからだ。

太宰の根柢はおそろしく古風な人情家であった。いや、人情に絶望しながら、人情の風儀にあこがれた。それは彼の家系の古さであると私は思っている。私は彼ほど人々に絶望しなが

ら、人々に甘え媚びた男を知らない。これも良家の不良の子弟が、早く孤独を知って、我儘に甘え媚びる環境の故に相違ない。従って彼が心のうちで勝手に数えている重要な作家達は、暗黙のうちに彼を認知し支援してくれているという妄想を、早くから持っていた。佐藤春夫氏、川端康成氏、小林秀雄氏、志賀直哉氏等。これらの作家達が次々に彼に讃辞を呈するであろうことは、彼の疑いを入れぬ確信に迄達していた。だから、芥川賞の選定の辞に川端康成氏が「私見によれば、作者目下の生活に厭な雲ありて」という意味の言葉を見た時の失意と憤激は直に太宰を駆って『文芸通信』の異様な抗議となって現われた。志賀直哉氏への抗議も、また同断であったろうと、私は想像する。

これらの失意の緩衝を得たく、豊島與志雄氏の理解に縋り、死の寸前迄、絶えず慰藉の泉を得ていただろう。戦後、坂口安吾氏、石川淳氏らと並び称されていたことは幸福であった。即ち安吾氏の健康濶達の良識を喜び、更に淳氏の孤独な文化継承の雅懐を見て、ひそかに千万の援兵を得ていたに相違ない。

太宰治の異様な仮構人生と文芸を、外部から終始、正常な作家生活の軌道に乗せてやりたいと苦慮しつづけていたのは、井伏鱒二氏であった。氏の庇護なくば、太宰の死は、おそらく十年昔に訪れていたに相違ない。この庇護による延命の途上『富嶽百景』等の一連の不思議な開花を見せている。然し結局に於て太宰は、彼の文芸と彼の仮構人生を完遂しなければならなかった。『春の盗賊』を見たまえ。洒脱剽軽に語られている彼の市井生活の底流に、不気味な、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.